

## 看護学生における対人関係価値のコホートによる相違

加藤久美子 近藤益子 多田政子<sup>1)</sup> 永田 博

### 要 約

医療短大入学年(1990年, 1993年, 1996年)において異なるコホートをなす看護学生の対人関係価値を入学直後に自己像と理想のナース像についてKG-SIV(Kikuchi-Gordon Survey of Interpersonal Values)によって測定した。その結果, 自己像評定では入学年が進むにつれて「支持」や「独立」の価値を重視する傾向が増大するのに対し, 「博愛」の価値は逆に重視されない傾向が見いだされた。また, 特に1996年では理想のナース像に対する要求水準が低くなることも明らかになった。この結果を看護学生の社会化過程と関連づけて考察した。

---

キーワード: 対人関係価値, 看護学生, コホート, 社会化

---

### はじめに

われわれは, 看護学生の対人関係価値に関する横断的<sup>1)</sup>および縦断的研究<sup>2)</sup>によって, 彼女らが看護学校ないし医療短大に入学した直後から卒業する直前までのほぼ3年間に, 次のような特徴的な学年変化を一貫して示すことを明らかにした。つまり, 他者のためになることをしたり, 不幸な人々に助力の手を差しのべるという「博愛」と, 他の人々の行動に責任をもち, リーダーになるという「指導」の価値が, 学年進行とともに重視されなくなる一方で, 他者から理解や親切, 思いやりをもって扱われたいとする「支持」や, 自分の思うように行動する権利を持ち, 自分独自のやり方で行動したいとする「独立」の価値は, 逆に重視されてくる。しかし, 以上のような変化とは対照的に, 彼女らの理想とするナース像は入学当初から卒業まで変わることなくほぼ一定のままである。そしてこのような学年変化は, 3年年少の高校衛生看護科の女子学生にもほぼ同様に観察されるが, 非看護系(児童学科を除く)の大学生では観察され

ない。このことからわれわれは, 上述の対人関係価値における学年変化を看護教育という公的な社会化過程と関連づけながら, さまざまな実証的検討をここ数年にわたって重ねてきた。<sup>3-7)</sup>

このような研究の過程でわれわれは常に, 上記の学年変化をかなり一般的な心理現象であろうと考えてきた。しかし, 看護学生が認知した看護教育従事者の対人関係価値を1995年時点で検討した加藤ら<sup>8)</sup>の研究では, 上記に示した特徴的な学年変化がクリアな形で認められなかった。つまり, これまでの結果では, 「支持」と「独立」の両価値を重視する程度は入学直後から卒業直前の間で有意に増大していたが, 1995年時点では有意差が生じなかった。また「博愛」の価値領域においても, これを重視する程度はこれまで有意に減少していたが, 1995年時点では同様に有意な減少傾向が見られなかった。卒業直前時での3価値領域の重視レベルに1995年入学生とそれ以前の入学生にほとんど差がないことからすれば, 1995年に医療短大に入学した看護学生は, 入学直後の時点ですでに

「支持」と「独立」の2価値領域ではこれを重視する程度が強く、「博愛」領域では逆に弱いという傾向があったと推測される。

本研究では、以上のような1995年の結果が単なるサンプリングエラーによるのか、あるいはもう少し意味のある心理的現象の反映であるのかを問題にする。本研究ではこれを、医療短大入学直後の看護学生の対人関係価値を1990年、1993年、1996年と異なる年度に入学した看護学生、つまり3種の異なるコホートの対人関係価値をその現実自己像と理想のナース像を比較することによって検討する。もし前節で述べた特徴的傾向からのずれが意味のある心理的傾向の現れであるとすれば、「支持」と「独立」の領域では入学年度が進むにつれてこの価値を重視する程度は増大傾向を示すだろうと予測されるし、「博愛」領域の価値を重視する程度は逆に減少傾向を示すだろうと予測される。これに対して、上述のずれが単なるサンプリングエラーであるのなら、入学年度にわたる一貫した変化の傾向は得られないはずである。

## 方 法

### 被調査者

調査対象となったのは1990年、1993年、1996年に岡山大学医療短大部に入学した3群の女子学生で、それぞれ79名、79名、77名の合計235名であった。

### 手続き

3群の被調査者がそれぞれの入学年に入学した直後の4月にKG-SIVが実施された。各群にはまず現実自己、次に理想のナース像の順でKG-SIVによる2回の評定が求められた。

現実自己評定においては、現在の自分がどのような対人関係価値を重視しているかが調査され、ほぼ1週間後に実施された理想像評定においては、現実自己評定とは異なり、各人で理想とするナース像を想定し、その立場から評定するよう教示された。いずれの評定においても、KG-SIVは講義時間中に配付し、1週間後に回収した。各被調査者には、1回目の現実自己評定の時に2回目の理

想像評定が実施されることは予告されなかった。

## 結 果

回収不能、記入不備等で無効となったデータを除いた結果、現実自己評定と理想像評定の2種類のデータが完全にそろった分析可能な被調査者数は、1990年入学群（以下90年入学群）では79名中70名（88.6%）、1993年入学群（以下93年入学群）では79名中72名（91.1%）、1996年入学群（以下96年入学群）では77名中63名（81.8%）であった。

図1に両評定の平均値を各価値領域ごとに示す。6尺度の最大値が異なるので、各尺度ごとに1変数に繰り返しのある3（コホート：90年入学、93年入学、96年入学）×2（評定：現実自己、理想像）の分散分析を行ない、その後Tukey法（ $p < .05$ ）によって平均値の差を検定した。

### 1. 支持

コホートの効果 [ $F(2, 202) = 5.76, p < .05$ ] と評定の効果 [ $F(1, 202) = 26.27, p < .001$ ] が有意であった。93年入学群と96年入学群の現実自己スコアはいずれも90年入学群に比べ高かった。また、96年群の理想像スコアは90年入学群と93年入学群のそれに比べ高かった。さらに、90年入学群と93年入学群では現実自己スコアの方が理想像スコアより高かったが、96年入学群では両スコアに差はなかった。

### 2. 同調

いずれの変数の主効果、および両変数間の交互作用にも差は認められなかった。

### 3. 承認

評定の効果が有意であり [ $F(1, 202) = 6.53, p < .05$ ]、90年入学群においてのみ理想像スコアが現実自己スコアに比べ高かった。

### 4. 独立

評定の効果が有意であり [ $F(1, 202) = 49.74, p < .001$ ]、各コホートとも理想像スコアが現実自己スコアに比べ低かった。また、入学年が進むにつれてこの価値を重視する傾向が見られた [ $F(2, 202) = 2.63, p = .07$ ]。

### 5. 博愛

コホートの効果 [ $F(2, 202) = 11.24, p < .01$ ]

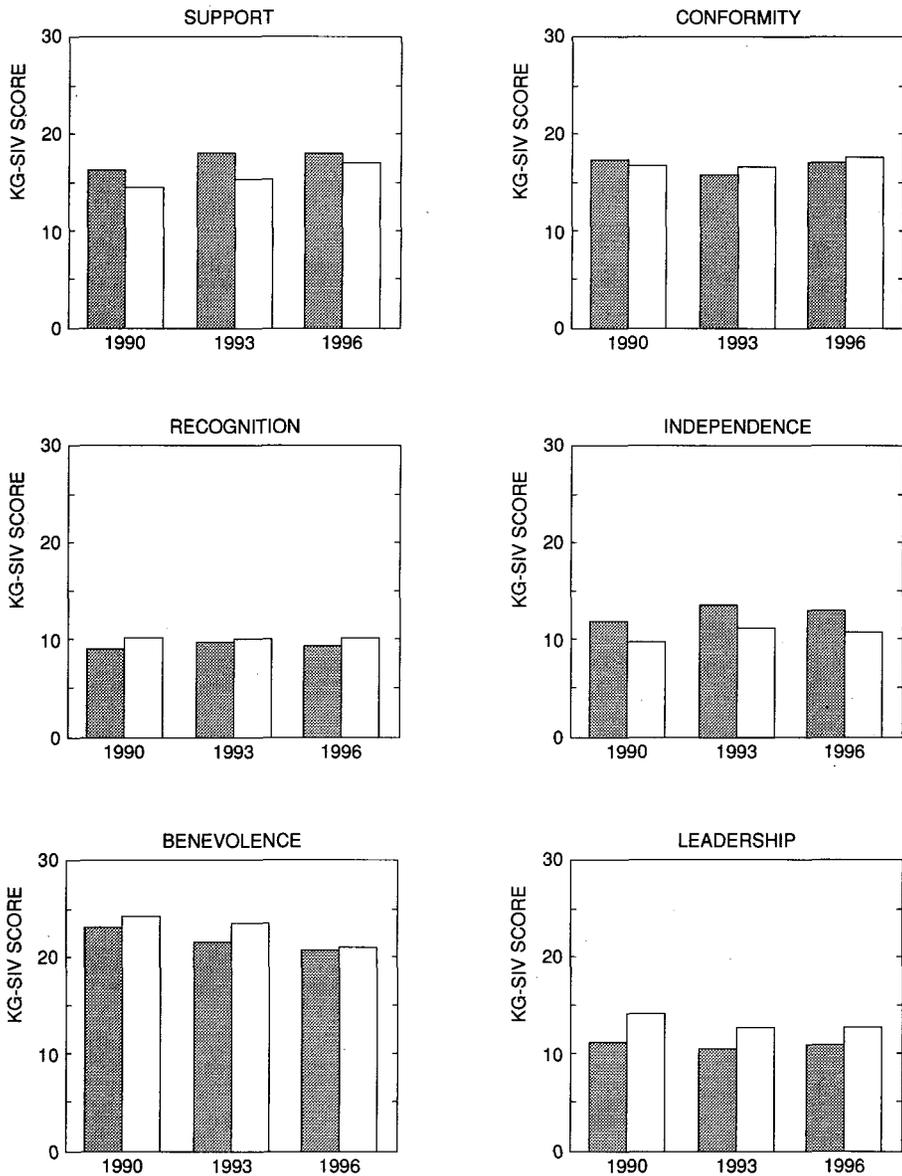


図1 各価値領域におけるKG-SIVスコア  
(黒バー：現実自己像；白バー：理想像)

と評定の効果 [ $F(1,202)=11.08, p<.01$ ] が有意であった。96年入学群の現実自己スコアは90年入学群のそれより低く、96年入学群の理想スコアは他の2群のそれに比べ低かった。また、90年入学群と93年入学群においてはいずれも理想スコアが現実自己スコアより高かったが、96年入学群では両スコア間に差はなかった。

## 6. 指導

評定の効果だけが有意であり [ $F(1,202)=51.21, p<.001$ ], 各入学群とも現実自己スコアに比べ理想スコアが高かった。

## 考 察

現実自己スコアに関してコホートによる有意差

ないし傾向差が得られたのは「支持」と「博愛」、「独立」の3価値領域であり、これは当初われわれが違いを予測した価値領域に一致している。またコホートによる違いの方向も、「支持」と「独立」では増大傾向、「博愛」では減少傾向とこれも予測と一致している。本研究で得られたこのようなコホートによる違いは、特に「支持」と「博愛」領域における理想のナース像の入学年による違いとも関連づけて考えてみると、単に偶然として片付けることにできない意味のある心理的傾向を表しているように思える。つまり、両価値領域とも90年から93年にかけては理想像に違いは認められないが、96年になると「支持」を重視する傾向が増大するのに対し、「博愛」を重視する傾向は逆に減少している。このため、93年まで得られていた現実自己と理想像との差が96年に至って消失する結果となっている。つまり、96年入学群では他者から理解や親切、思いやりをもって扱われたいとする「支持」に対する動機づけが強くなるのと平行して、内的基準ともいえる理想のナース像においても要求水準が低いレベルに設定され、他者依存傾向が強められている。逆に、他者のためになることをしたり、不幸な人々に助力の手を差しのべるという「博愛」に対する動機づけが減退するのと平行して、内的基準においてもこの価値に対する要求水準が低いレベルに置かれている。これらの事実は、もし「他者に対してサポートを求めるといふ支持」と「他者をサポートしてあげるといふ博愛」が負の関係にある<sup>注1)</sup>とすれば、この6年間に於ける看護学生の対人関係価値の変化は他者援助に対する動機づけの低下を示す方向へ向かっていると見てよいのではないと思われる。<sup>注2)</sup>

本研究で得られた対人関係価値のコホートによる違いは、他の研究でも同様に報告されている。武内<sup>9)</sup>は女子大生について1983年から1993年の10年間の時代変化を調査しているが、変化が生じているのはやはり「支持」と「独立」、「博愛」の3価値領域であり、しかもそれぞれの変化の方向もわれわれの結果と全く同じ方向を示している。武内はこの時代変化を個人的価値尺度(KG-SPV: Kikuchi-Gordon Survey of Personal values)の

結果をも踏まえて、「生き方がルーズになり、多様な経験を求めながら、より未熟で自己中心の生き方をするようになったと言えよう (P. 132)」と考察している。武内のこの指摘は、全体としてみれば、看護学生にも当てはまるかもしれない。しかし、注2で明記したとおり、われわれが指摘した変化はあくまでも入学年にわたる変化であって、価値領域間の相対的变化ではない。看護学生が「博愛」を重視する程度は、1996年時点においても、他の価値領域を重視する程度と比較しても、一般女子大生のそれに比べてはるかに高い。<sup>注3)</sup>従ってこの点では、看護学生の社会化過程において Davies<sup>10)</sup>のいう「愛他心というヒューマニスティックな価値づけが基調となる」第1段階を設定することは、今なお有効であると思える。ただ、本研究で明らかになったことは、この第1段階で生じるとされる価値づけの程度に入学年が進むに伴って緩やかな減退傾向が認められるということである。従ってこの意味では、これまでわれわれが看護学生の対人関係価値に関して指摘してきた学年進行に伴う心理的葛藤が、幾分緩和されつつあることが示唆される。

本研究の結果の外的妥当性については、引き続き調査を継続することによって確認していかなければならない。その結果、本研究でわれわれが指摘した対人関係価値上のコホート間の変化が確実に生じているとするなら、この知見は、毎年異なるコホートを迎える看護教育従事者がその看

注1) Kikuchi & Gordon<sup>11)</sup>によると両価値の相関は有意である [ $r(198) = -.20, p < .05$ ].

注2) この記述はあくまでもコホート間の相違に関するものであり、「支持」と「博愛」という価値領域間の比較に関するものではない。96年入学群においても、「支持」に比べ「博愛」を重視する傾向は現実自己においても [ $t(62) = 2.62, p < .05$ ], 理想像においても [ $t(62) = 4.48, p < .001$ ] 同様に強い。この点は明記されねばならない。

注3) この点、医療短大の看護学生と4年制の看護学生とでは幾分違いがあるようである。4年制の看護学生では「博愛」を重視する程度が医療短大生よりも低く、その程度は一般女子大生に近い(亀田<sup>12)</sup>, 永田ら<sup>13)</sup>を参照)。

看護教育プログラムを組み立てていく際の有効な手がかりの一つになると思われる。

文 献

- 1) 永田博, 小川節子, 近藤益子, 大羽葵: 看護学生における対人関係価値の学年変化—自己像およびナースの理想像の比較による検討. 看護展望 16: 1168-1174, 1991.
- 2) 永田博, 近藤益子, 小川節子: 看護学生における対人関係価値の学年変化—縦断的研究法による内的妥当性の検討. 看護研究 27: 41-48, 1994.
- 3) 永田博, 近藤益子, 小川節子, 大羽葵: 看護学生における対人関係価値の学年変化とその教育的意義. 看護教育 31: 484-490, 1990.
- 4) 永田博, 武内信子, 小川節子, 近藤益子, 大羽葵: 看護学生における対人関係価値の学年変化—看護系高校生と非看護系大学生による検討. 看護展望 17: 1420-1428, 1992.
- 5) 永田博, 近藤益子, 小川節子: 看護学生における対人関係価値の学年変化—CASによる不安の程度と構造との関連. 看護展望 19: 382-387, 1994.
- 6) 永田博, 近藤益子, 小川節子: 看護教育従事者が看護婦や看護学生に求める対人関係価値. 看護教育 35: 534-538, 1994.
- 7) 永田博, 小川節子, 近藤益子: 看護学生における看護関連諸概念の情緒的意味—対人関係価値との関連. 看護展望 20: 376-383, 1995.
- 8) 加藤久美子, 佐藤美恵, 近藤益子, 小川節子, 永田博: 看護学生が認知した看護教育従事者の対人関係価値. 看護教育 (印刷中)
- 9) 武内信子: 女子大生及びその両親にみられる価値観とその時代変化—対人関係価値尺度・個人的価値尺度を通して. ノートルダム清心女子大学紀要 19: 129-133, 1995.
- 10) Davies F: Professional socialization as a subjective experience: The process of doctrinal conversion among student nurses. In C Cox & A Mead (eds.), A sociology of medical practice, Collier-Macmillan, London. 116-131, 1975.
- 11) Kikuchi A and Gordon LV: Evaluation and cross-cultural application of a Japanese form of the survey of interpersonal values. J Soc Psychol 69: 185-195, 1966.
- 12) 亀田真美: 看護学生の対人関係価値の学年変化と看護職に対する認識 第4回卒業研究集録 (東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻) 55-60, 1996.

## Differences in interpersonal values for three cohorts of new nursing students

Kumiko KATO, Masuko KONDO, Masako TADA<sup>1)</sup> and Hiroshi NAGATA

### Abstract

KG-SIV (Kikuchi-Gordon Survey of Interpersonal Values) was administered twice to three cohorts of new nursing students admitted to School of Health Sciences, Okayama University, respectively, in 1990, 1993, and 1996. For the first testing, they indicated the values that were important to them, while for the second they indicated those that were important to an ideal nurse they had in their mind. Analyses showed that perceived values of Support and Independence increased while those of Benevolence decreased with the admission years. They also showed a reduced level of aspiration for an ideal nurse, particularly in 1996. Findings were discussed as they were related with a socialization process that nursing students would undertake in prospective nurse training.

---

**Key words :** interpersonal values, nursing students, cohorts, socialization

---

School of Health Sciences, Okayama University

1) Department of Health and Welfare, Kagawa Prefectural Government